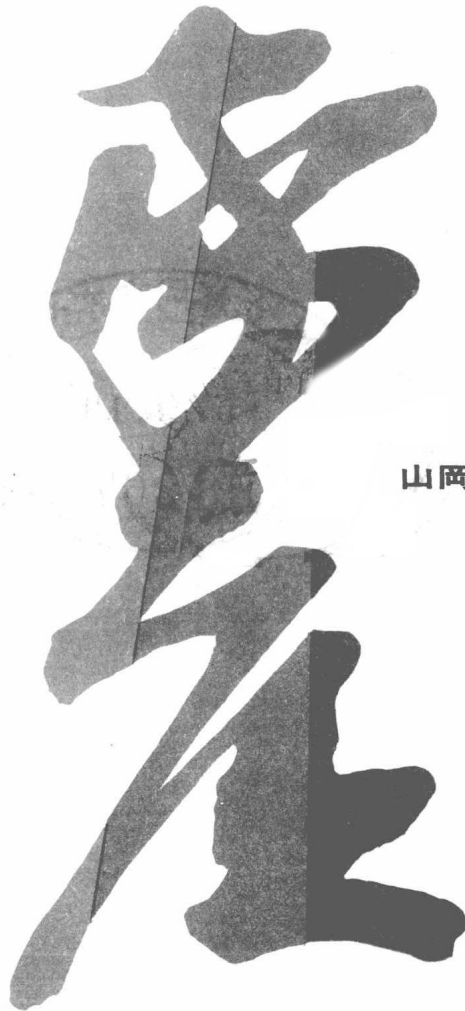


出生乱離の巻・獅子の座の巻



山岡莊八 講談社

徳川家康 第一卷 出生乱離の巻
獅子の座の巻 昭和五六年一〇月
二〇日 第三二刷発行 著者 山
岡莊八 発行者 三木 章 印刷所
豊国印刷株式会社 製本所 大製
株式会社 発行所 株式会社講談
社 東京都文京区音羽二―一二―
二一 振替東京八―三九三〇 電話
東京 (九四五) 一一一一 (大代表)

© 藤野稚子 一九六三 Printed in Japan 定価一八〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りくだ
さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

徳川家康

1

出生乱離の巻
獅子の座の巻

目次

出生乱離の巻

暁以前

七

春告鳥

一八

雨の蕾

三二

春陽

四三

馬蹄のあと

五六

女性の歌

六四

罨と罨

七五

乱れ萩

八五

小豆坂

九六

今生未来

一〇七

冬来りなば

一二七

照る日、曇る日

一二八

塵土の嘆き

一四三

輪廻

一五七

謀略

一六八

戦国夫婦

一七八

秋雷

一八九

別離

一九九

希望の梅

二〇七

お湯殿問答

二一八

想夫憐

二二七

桜ぶろ

二四二

春雷の宴

二五二

獅子の座の巻

至遠の望

二六四

秋霜の城

二七五

桔梗責め

二八八

一粒の米

二九八

人質発航

三〇八

潮見坂

三二九

恋慕しぐれ

三四〇

孤囚の母

三五二

流れる星

三七〇

備えなき城

三八二

あとがき

三九三

付 録 (参考地図及び諸家系譜)

装 幀 稲垣行一郎

挿 画 木下 二 介

箱裂地 麻地草花人家文様茶屋染

提供 山口 勉

表紙金版 徳川家康直筆署名

徳川家康

1

出生乱離の巻
獅子の座の巻

出生乱離の巻

暁以前

一

武田信玄は二十一歳。

上杉謙信は十二歳。

織田信長は八歳。

後の平民太閤、豊臣秀吉はしなびた垢面こうめんの六歳の小童だった。

この年、天文十年——

一衣帯水の海の彼方は明みんの時代、ヨーロッパではチャールス五世が、フランシス一世に開戦を宣してフランスに侵

入し、ヘンリー八世はアイルランドの王位を得て、スコットランド王ジェームスを除かんと虎視眈々爪牙を矯めるという西暦一五四一年。

西も東も、おなじ戦国の風雲につつまれた十六世紀中葉の、わが三州岡崎城の奥であった。

季節は冬。といつてもすでに年は越して正月だったが、今年の氣候はいつもより温く、伊勢の東条持広から贈られた庭の柑橘の実は金色にいろづいて、甘い芳香をあたりいっばいに撒きちらしていた。

その香をしたって来るのだろうか。今年は庭に小鳥が多い。十六歳になった若い城主松平次郎三郎広忠はその小鳥に射かけるような視線を投げて、もう半刻も黙っている。

去年の桃の季節に生れた長子の勘六が、時々陽だまりから膝のほとりに這いよって、この若い父親の苦悩をきょんと見上げてゆく。

広忠より二つ年上のお久の方はそのたびに、胸の中を冷たい風に吹きぬかれた。

「まだ、ご決心はつきませぬか」

十五歳で十三歳の広忠の側女そばめにあげられたお久の方は、同じ一族の松平左近乗正の娘であった。それがすでに子供を産んで十八歳になっている。どこか淋しい白椿の風姿であったが、それでもめつきり艶冶えんげさを加え、侍女をしりぞ

けて三人ここにこうしていると、それは親子というより、姉が弟をさとしてしているように見えた。

「お屋形が素直にご承知くださいませねと、久がきびしく責められます。老職の方々は、久の嫉妬がお屋形のご決心をにぶらす因と噂して居りますそうな」

「お久——」

「はい」

「そなたは何故その噂どおりに嫉妬せぬ。いずれは正室との約束で予と契った……それをそなたは忘れたのか」

「と、申しまして、お家のため一族のためでございますもの」

お久はそういうと、這い寄るわが子をそっと抱きあげ、
「それに、於大さまは、海道一の嫺女と、近隣に聞えたご器量のお方。快くお迎えなされて老職がたを安堵させてあげて下さりませ」

広忠はきつとお久を振りかえった。蒼白な細面に若い憤怒がピクピクと動いている。

「すると、そなたもこの広忠に、敵の娘をめとってそれに仕えよと申すのかッ」

「おん家のためでございますもの」

「言うなッ」広忠はびしりと強く膝を叩いた。がしかし、その強い語気もそれきりで、悲しい沈黙がまたつづいた。

いつか薄く臉がうるんでいる。

「於大はのう、予のためには継母華陽院の腹をいためた娘ではないか。予にとつては敵の娘でしかも義妹。いかに生くるためとは言えわが妹を娶るというは……」

広忠の声がかすれると、

「何ごともおん家のためでございます」

もう一度感情を殺しきった無感動なお久の声がシンとひびいた。

二

新しく広忠の正室に迎えられるようとして話の出ている於大の方は、広忠が去年いっぱい戦いぬいた、岡崎とは境を接する刈谷の城主水野忠政の娘であった。

年は広忠より二つ年下の十四歳、容色はすでに近隣に鳴りひびいている。それだけに、若い広忠はいつか一度於大を見たいと思わないこともなかった。が、それはどこまでも継母華陽院の腹をいためた義妹としてで、負け戦のあとで押しつけられるはじめな縁談の相手としてではなかった。

「——松平の小倅に於大を遣わしておく、また何かと便宜なこともあろうよ」

でっぷりと肥えた水野忠政の底の知れない艶やかな分別

顔が、広忠にはいらいらと思ひ出される。

「お久——」

「はい」

「そなたは、予の生母がみまかったのち、父のもとへ、継母華陽院の興入れして来たときの風評を存じているか」

「はい……いいえ」

「知っていても口には出来ぬ……というのであろう。予はそれが口惜しいのだ」

「でもそれは、遠い昔でございますもの」

「いや——」と広忠の眼はまたキラキラと光りを添える。

「華陽院は、刈谷の城で、水野の和子五人を産んだ。忠守、信近、忠分、忠重、それに於大じゃ。みな屈強な者どもばかり。その一門の正腹を、なぜ良人の忠政が離別したのか。そしてなぜわが亡父のもとへ興入れさせたのか……」

お久の方は、あわてて広忠の膝にすがった。

「それをおっしゃってはなりません。それをおっしゃられますと、久は……久は……」

やはりこの縁談で、いちばん大きな打撃をうけているのはお久の方であった。五人の子の母を離別して、わが愛妻をさきげなく松平家の奥へ送り込んで来るほどの水野忠政。その忠政の娘を迎えたあとで長子を産んでいる自分は、いったいどうなるのか……？

と、いつていま水野一門を敵には出来ない松平家であつた。

もともと松平家も水野家も駿府の今川氏に志を通じている。が、この頃になって尾張の織田一族、信秀の圧迫は刻刻に加わって広忠にとっては大伯父にあたる桜井の松平内膳などは織田信秀に内応し岡崎城をわが手に納めようとしきりに画策しているそう。

それで岡崎の老臣、阿部大蔵と大久保新八郎忠俊に、口の酸くなるほど、

「——何ごとも忍んでください。まだ殿は子供でござるゆえ、あなたさまが、おさとしくください」

松平家存亡の危機として、お久の方は悲しい因果をふくめられている。それなのに、広忠は決してウンとは言わなかった。亡父の清康までが、水野忠政の陰謀におどらせられ、彼の子を五人も産んだ年上の妻を押しつけられたと信じているからだ。

広忠は自分の膝で泣きくずれているお久の方と、またしても這いよっていぶかしそうに父を見上げる嬰兒を見る

と、

「お久、よいことがあるぞ」
低い声であたりを見廻し、それからそっとお久の耳に口をあてる。何を囁いていったのか？

お久の顔からずっと血の気がひいていた。

三

「相分ったか？」

広忠が声をためてもう一度そつとあたりを見廻すのを、お久の方は緘るように眼を放たず、

「そ……そのような酷いことを」

頬をひきつらせ、膝に重ねた手を震わしてつぶやいた。

「酷いことはない。これが相手の狡智への返礼じゃ」

「だと申して、於大さまには何のところがもごさいませぬ」

「とがのないのは予もおなじ。だが、予は祖父も父も焼刃にとられた。予もまたいずれ焼刃の下で生命をおとそう。

このような世の中では殺さないものは殺される。生きぬくためには五人の子の母さえ間者に入りこませるのだ……」

「シ……」とお久は広忠をさえぎった。広い廊下に人の登音がしたのである。お久の侍女の方であった。

「北の丸から華陽院さまお渡りでございます」

二人はハッと顔を見あわせた。そしてそそくさと広忠が立ちかけると、

「お出迎えには及びません。そのままそのまま」

よく透る若々しい声といっしょに、当の継母華陽院が微笑をふくんで顔を出した。

「おお、勘六どのもご一緒か。しばらく見ぬ間に大きゅうなられた。さ、ばばが抱いて進ぜましょう」

華陽院は、広忠の父の清康が刺されてからは、髪をおろして源応尼と名乗っていた。すでに三十はずっと出ている。それなのに、鼠いろの頭巾をかむって微笑している姿には、こぼれるような匂いがあった。

勘六はこの祖母が好きらしい、彼がバババと頬一ぱいを笑いにして華陽院の膝に乗ってゆくと、

「よいお天気で……」華陽院は膝の嬰兒をあやす口調で、

「ここへ来ながら、酒谷、風呂谷をのぞいて来ましたが、どちらへももう驚が来ています。梅もそろそろ咲きかけました」

「早いものでございます。つい、この間まではきびしい木枯の中で戦っていましたのに」

広忠がちくりと皮肉な眼をむけたが、華陽院はあっさりそれを聞き流して、

「広忠どの、於大から今朝ほど手紙が届きました」

お久の方はそつと居間を出ていた。

「若い娘の手紙はひどくのどかなもの。何よりも松平家と水野家の和議がうれしい。広忠どのほどのような気性の方かなどと、明るい夢をひろげています」

「きびしい世間を知らぬからでございましょう」

「きびしい世間といえば広忠どのも、まだまだそれを知りませぬ」

華陽院はそこで勘六をかぎすようにして声を立てて笑った。

「のう、勘六どの。お父さまは、亡くなられたお祖父さまよりまだ気性が練れませぬのう。東に今川、西に織田、甲斐に武田、小田原には北条。こんな御時勢に、松平や水野が争っていたのではどちらも疲れてバツクリ誰かの餌食になる。広忠どの、この縁談は、実はこの尼があれこれ考えましたこと、まさか不承知ではございますまいのう」

とろりと言って、また華陽院は、勘六の笑顔を高くかぎして頬ずりした。

四

広忠には華陽院のいかにも落着きはらった差出口がたまらなかった。この女を並々ならぬ才女とは父も認めていた。それだけに亡父と比較されて若さを言われるとカーッと頭が熱くなる。

「それはそれは。母上のお心遣いとあればいっさい異見は申せませぬ」

「それを伺って私も安堵。実はこの事は、亡くなられたお父上のお望みでもありました」

「なに父上の……？」

華陽院は始めてびたりと視線を広忠に据えた。

「広忠どの、女子おんなのさだめは殿御にわからぬ悲しいもの、うつし世の集合別離は夢のまた夢。二夫にまみえ、三夫に仕えて生きるのは、ただ一つの未来に子孫の栄えを見たいばかりのことなのです」

「と、おおせられると、母上は、この岡崎城の血筋の中に水野家の子孫を残そうとか」

「いいえ。お父上のお見出しにあずかったこの婆ばばとあなたの血筋を」

「フーム」と、広忠は唸った。彼はこの華陽院が父に嫁いで来たときの真の事情は知らなかった。彼は華陽院が水野忠政の陰謀から、無理に父の後添えに押しつけられたと思っている。が、事実はその逆であった。

父の岡崎三郎清康は、今とちがって実はじりじり水野の刈谷城を圧迫していたのである。そして、或る日、忠政のもとを訪れた酒宴の席で、

「――これはまた薦すすめた、この婦人を予にくれぬか」

相手が五子の母であり忠政の正妻と知っての上で戯れた。この戯れは弱者にとって戯れでは済まなかった。清康の武威をおそれる忠政はそっと妻を離別した。そしてそれを清康は娶ったのである。

しかしその時の華陽院の悲しみは、今では誰にもわからなかった。松平家と水野家の武力の位置が顛倒しているからである。

華陽院はそうした悲劇をなくするために両家を堅く結びたかった。が、争うたびに敗色の濃い広忠に、それは素直に受けとりかねた。

「母上の仰せとあれば迎えましようが、もし於大どのに子のない時には離別する。それにご異存ありませんか」

広忠が勢いこんでそういうと、華陽院は笑いながらうなずいた。そのうなずき方の淡泊さが弱者の僻みをまたあおる。

「それに……」と、広忠は眼をひきつらせて、

「もし万一、両家の間に干戈をとってまみえる事のあるとき、その時には討ち果しても苦しゅうござりませぬか」

華陽院はまた笑った。男たちが武力をもって暴れ廻る修羅没義道の世界なのである。そんな世界で女にいったい何が出来るというのであらう。許されていることはただ一つ。その修羅道に身をおきながらわが子を産んで次代を奪うばかりであった。

「どうぞあなたの宜しいように」

さすがに広忠は、ぐっと詰った。いかに感情にかられてもお久の方に耳打ちしたことだけは口に出来ない。

（よし来て見ろ、折を見て毒害してやる……）
と、そこへ物々しい表情で、重臣たちがやって来た。

五

「どの、刈谷の城からお使者でございます」

大久保新八郎が坐るといっしょに押しかぶせる口調でいうと、

「水野忠政どの、殊のほかこの縁談にご執心と見えますなあ」

岩くれに似た体の阿部大蔵はひとりごとのようにいって、侍女の方に眼くばせした。万は心得て華陽院の手から嬰兒をとって去ってゆく。

「何しろいまは、一に忍従、二に忍従」

叔父の藏人信孝はちらりと華陽院を憚って、

「実力を養わねばのう……」とため息した。

「華陽院さまにしても血をわけさせられたお仲ゆえ四方八方丸くゆく」

「いやいや、それは小さなこと。もっと大局をよく見定めねば相成らぬ」

大久保新八郎は真向から切りつけるように広忠を見すえて、

「いったい次の天下を誰がとるか？ この見透しがすべて

の動きの根本にならなければならぬ」

「いかにも。いったい誰であらうか？」

「武田の伴暗信は、しきりに駿府の今川家をうしろから衝こうとしているそうな。と言って、今川も強大だし、織田信秀は日の出の勢いでひびいている。足利のご家人たちもまだまだ見捨てたものではない。要するにこの大勢力にはさまれた小国の相争うのだけは絶対にやめねばならぬ。近隣親しく相結んで、互いに事情を知らせあい、いかなる手を打とうと生き残らねば相成らぬ」

「さよう。そうした時機に、先方からの縁談なのだから、これはまさに、御家の万歳、渡りに舟といわねばならぬよ」

みんなの話をニコニコと聞いていた華陽院はこの時はじめて手を振った。

「もうそのようなご心配は不要になりました」

「と仰せられるとどのには？」

「私からすすめました。眼をつむって迎えてくれますそうなのう、広忠どの」

広忠が苦^{にが}りきってブイッと脇をむいたが、

「それはそれは。いや、これはめでたい」

「おめでとうござりまする」

「おめでとうございます」

一族老臣、言いあわしたようにハッハッハッと声を合して笑いだした。そのかみの男女の間は、身をつくして恋いわたる哀しく透明な営みだったのに、いまでは恋も女子も生残る一族一家の用具に価値を変えている。女を贈り女を迎えて今日の争いを弱め、明日はわが子孫を敵の中にふやそうという。

それは限りなく高い情感の世界から、あまりにみじめな理性への転落だった。

若い広忠にはその計算が不潔なものに思えてたまらなかった。

「もう分った。笑うな」

広忠は顔をしかめてみんなを叱り、もう一度こころの底でわが怒りをたしかめた。

（久にいいつけて、毒害してやるとは気がつくまい。誰が水野ずれの思うとおりに……）

それから声を柔げて、

「そう決ったら早いがよい。万事母上に相談してよきに計らえ」

「ははッ」

みんな再び顔を見合った。

誰からともなくやっぱり笑いだしている。それほど彼等にとって、これは大きな意味の政略の成功だった。

六

刈谷城の水野忠政は、岡崎城へ使いにやった秋元天六の復命で、松平広忠、縁談承知のことを聞くと、

「これでよい、これでわしの生涯の仕事の仕上げは出来てゆく」

去年の秋からめっきり眼立つ白髪を近侍に撫であげさせて、末娘の於大を居間に呼んだ。

「どうだ、そなたも嬉しいか」

於大は大柄な顔をかしてニコリとする。頬から眉の豊かさは父に似て、透明な皮膚の白さと肌理の匂いは母に似ていた。その母のいる城へ嫁ぐことに決ったのである。

「なによりも母上にお目にかかれるのが嬉しいうございます」

「そうであろう。それで……わしも嬉しい」

どこか木彫の大黒天を想わす水野忠政は、母と別れて育ったこの末娘に心のしびれるほどの愛おしさを感じた。

十四歳にしては大柄だった。

眼は切れ長で、黒髪の下からのぞく桜いろの耳朶のふくらみが殊に美しい。襟あしと肩のまろみに大人びた媚めきを感じさせるほかには、まだどこもかしこも稚く見える。が性格は兄妹の中でいちばん複雑で物言いのあどけないの

は、言うべきことを言いきる時の用意に見えたし、内部の強さと敏さとは柔かく笑顔のかげにかくされている。

父への理解も兄や姉を超えていた。

「興入れには一月、九月をきらうというが、わしはそのような迷信は無視してよいと思う。思い立ったが吉日というからのう」

「はい。だいいもそのようなことは気に致しませぬ」

きちんと言いきられると、忠政はニコニコと頷いた。

「用意はもうすっかりできています。結納は戌の日に来るそうなの。だが、嫁いでしまうとどうそなたにも会えなくなる。今日はひとつゆっくり肩をたたいて貰おうかの」

「はいよろこんで」

於大はすぐに父のうしろへ廻った。今日もきれいに晴れていて、海に面したこの城の本丸には、生毛のような東風が微かに流れこんでくる。於大の手が軽く肩で鳴りだすと、

「これは念のために訊いておくのだが、そなたにはこの縁談を、なぜ、わしがこのように喜ぶのか、そのわけはわかるかの？」

於大はうしろで生真面目に首をかしげた。分っていないがらはっきり父に言わせようとする賢い娘の無言らしかった。